

アーカイブズ学的手法を用いたライフ・ヒストリーの復元研究

The Study on restoration of Life History using archival science method

学籍番号：201521623

氏名：鈴木 美識

Misato SUZUKI

「家族」に対する社会的関心が高まっている。例えば国内では家族の歴史を扱う番組や家系図調査の業者が出現している。本研究では一族としての「家族」ではなく「個人」に着目し、個人が一生を過ごす中で蓄積された個人の歴史や人間性（ライフ・ヒストリー）の復元を試みる。ライフ・ヒストリー研究の方法は本人の語りをもとに行われるのが通例であるが、亡くなった人物に聞き取りはできない。日記や手紙などの他に残された資料すべてを用いて復元する必要があるが、実際に行われている研究は管見の限り見受けられない。目的は、ライフ・ヒストリーの復元において残された資料から得られる情報は何か、人物像に関して得られるものは何かを整理し、資料を用いたライフ・ヒストリーの復元方法を提案することである。また、ライフ・ヒストリーにおける残された資料の位置づけを検討することも副次的な目的と置いた。対象は鈴木正太郎（1925－2014年）とし、自宅から収集した資料481点を用いた。方法は①公的機関の記録による対象基本情報の把握②階層構造を用いた資料の全体像把握と構造分析③内容や年代による資料の個別資料④その他ライフ・ヒストリーに関わる資料の抽出の4段階である。②、③においてはアーカイブズ学における原秩序尊重の原則に留意した。

結果、①により対象（と子供）の出生、婚姻、軍歴、家系図を得られた。②は資料の全容把握だけでなく、保管状況から生活イメージを探ることができた。③では各年代の出来事、居住歴、資料を整理・使用していた時期などを推測できた。④では①の履歴の補強と、対象の関心を推察することができた。よって、①から④はライフ・ヒストリーの復元方法として有用であるといえる。また、残された資料の位置づけとして、記憶が資料分析の手がかりとなること、資料が対象を思い出す手掛かりになることが考えられた。前者は例えば歌詞の利用状況や写真被写体など、資料だけでは分からない情報が分析の手がかりとなった。後者は、調査前には対象について「何も知らない」と話していた家族が各資料を手がかりに人物像を思い出す、といったことがあった。よって、残された資料は「見えていた姿」と「見えていなかった姿」を合わせてライフ・ヒストリーを復元する機能と、「見えていた姿」の記憶を掘り起こす機能があり、両者によって個人をより強く遺すことにつながると思われる。

研究指導教員：白井 哲哉

副研究指導教員：小泉 公乃